近世・近代に奈良県北西部で活躍した瓦師の窯

藤澤瓦屋　平松一丁目

達磨窯（だるまがま）の発見

発掘調査地は平城京跡内にあり、奈良時代の遺跡の確認を目的として調査を実施しました。しかし、当初予想しなかった近代の瓦窯を確認し、これが「達磨窯」と呼ばれる近世以降の瓦窯であることが判明しました。

達磨窯の構造

達磨窯の名称は、ダルマが座禅を組んだ姿に外観が似ることから名付けられています。発掘調査では窯の地下部分が残るのみで、特徴的な外観は失われています。窯の構造は、中央部に瓦を置く部屋（焼成室）、その両側に燃料を焼く部屋（燃焼室）があり、両部屋の間は壁で仕切られ、下部のスリット状に開く孔から焼成室に焔が流れ込みます。焼成室側面には瓦の出し入れ口が１ないし２口設けられます。燃料が薪から石炭に変わる明治後半頃には、燃焼室の底に空気を送り込む施設（風道）を付け加える改良が行なわれます。

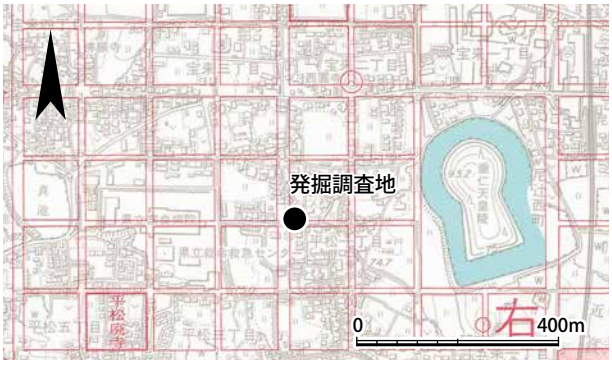
藤澤瓦屋の達磨窯

発掘調査で見つかった達磨窯は６基あり、内３基に風道があります。重複する達磨窯もあり、数時期にわたり操業していたようです。最も新しい窯は、風道を含め全長が 7.0 m以上、焼成室内法が幅約 1.8 m、長さ約 2.7 mあります。

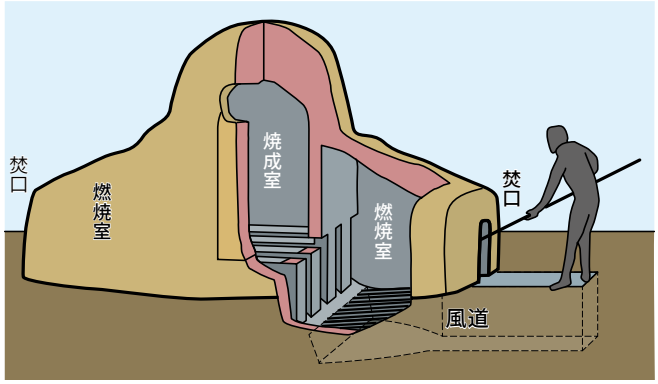
焼成室には瓦を乗せる畦が４条あり、上半部が失われ高さ約 0.2 m分が残るのみです。燃焼室下には風道部分が残りますが、それを埋め上に新たに粘土で床面を作ります。つまり石炭焚きから薪焚きに変わったようで、戦時中の石炭の供給不足の影響をうけたものと考えられます。

土地所有者の藤澤家は、代々瓦製造を行っており、聞き取り調査によると昭和戦中期には瓦生産を止めているようです。発見した達磨窯は明治後半から昭和中頃のもので、風道のない達磨窯は更に時期が遡るものと考えられます。

達磨窯は、燃料のガス・石油への転換や大気汚染への影響から、戦後急速に失われて行きます。今回の発見は、大和における達磨窯の終焉の姿を伝えてくれるものと言えます。



調査地位置図（1 ／ 15,000）



達磨窯模式図

達磨窯全景

「瓦利」の刻印瓦から

調査では軒丸瓦・軒平瓦・軒桟瓦・丸瓦・平瓦・桟瓦・塼（せん）等の他に、「瓦利」の文字が陰刻された刻印瓦9点が出土しました。大正6年（1917）に刊行された『實業重寶』という書籍には、「瓦製造　瓦利　藤澤利喜藏　生駒郡伏見村」の一文があります。このことから、「瓦利」は藤澤瓦屋の屋号であったと判ります。藤澤家に伝わる史料やご子孫への聞き取りから、遅くとも江戸時代後期の19世紀初めには瓦屋を操業し、戦時中に廃業したことがわかりました。瓦師には「利八（利八郎とも。嘉永5年没、59才。）」、「利七（明治32年没、65才。）」、「利兵治（利平治、利平次とも。大正14年没、74才。）」、「利喜蔵（昭和31年没、72才。）」の名前がみられます。また、西大寺愛染堂の修理工事でみつかった、江戸末期とみられる軒平瓦・桟瓦には「平松村瓦師利兵衛」とあり、「利」を通字とした家であったとうかがえます。

笵（はん）（軒瓦の紋様型）から

令和元年に藤澤利喜蔵のご子孫から、家蔵の史料とともに、瓦製作道具が寄贈されました。そのうち笵は木製・瓦製・石膏製のもの合わせて112点あります。

木製・瓦製笵には使用寺院が特定できる笵があり、これらから西大寺・唐招提寺・薬師寺・王龍寺（二名町）、三松禅寺（七条町）等の奈良市西部の寺院だけでなく、生駒市圓光寺や生駒郡斑鳩町法隆寺の瓦も製作していたことがわかりました。また、浄土院（西大寺小坊町）の鬼瓦には「平松村　瓦や　利八」の銘文が、生駒郡安堵町常徳寺の鬼瓦のひとつには、「平松村」・「寅十月吉日　加わらや　利七」の銘文がみられ、これらの寺院の瓦も製作していたことがわかります。

江戸時代後期以降の資料ではありますが、これらは藤澤瓦屋が主として奈良県北西部（元は添下郡・平群郡、後に生駒郡）を中心に活躍したことを物語る貴重な資料と評価できます。

なお、西大寺、唐招提寺、王龍寺、圓光寺には今回展示した笵で製作したとみられる軒瓦が今も現役で屋根に葺かれています。

発掘調査による出土瓦塼類と陰刻「瓦利」

木製笵（唐招提寺）

木製笵（薬師寺・西大寺）
（上から「西京佛足跡」、「薬師寺講堂」、「西大寺金堂」）

木製笵（王龍寺）
軒平瓦の「海瀧山」は山号

瓦製笵（法隆寺）